

2024年1月1日の記事

【館長より新年のご挨拶】

新年明けましておめでとうございます。

昨年はコロナ禍が落ち着きはじめたことを受け、事前予約制ではありますが一般公開を開始することができました。

また、「キリンが来た道」というテーマで念願の本格的な企画展を初めて開催し、キリンファンの中心に多くの方々に御観覧いただいております。

今年は、本館を獣医生命科学の総合的博物館へ発展させるべく、獣医学の歴史展示やワイルドライフ・ミュージアムを中心とした企画展をさらに充実させてゆく予定です。

また4月には企画展のフィナーレとして、第一線のキリン研究者の方々に登壇いただく「キリン講話会」を開催いたします。

皆様のご来場をスタッフ一同、心よりお待ちしております。

本年も引き続きFacebook等で当館の情報を発信してゆきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

日本獣医生命科学大学附属博物館

館長 羽山伸一



【資料紹介16】ニホンジカ角標本

今年は「辰年」、松の内を過ぎましたが、年の始めは多くの場所で力強い龍のイラストを目にしました。龍といえば、長細い体に立派なひげ、そして頭に生えた2本の角を思い浮かべる方が多いかと思います。中国の宋代に作られた辞書『爾雅翼(じがよく)』では、龍の姿の角はシカ、頭はラクダ、目は鬼(ウサギという説もあり)、首はヘビ、腹は蜃(みずち)、鱗はコイ、爪はタカ、掌はトラ、耳はウシに似ていると紹介されているそうです。

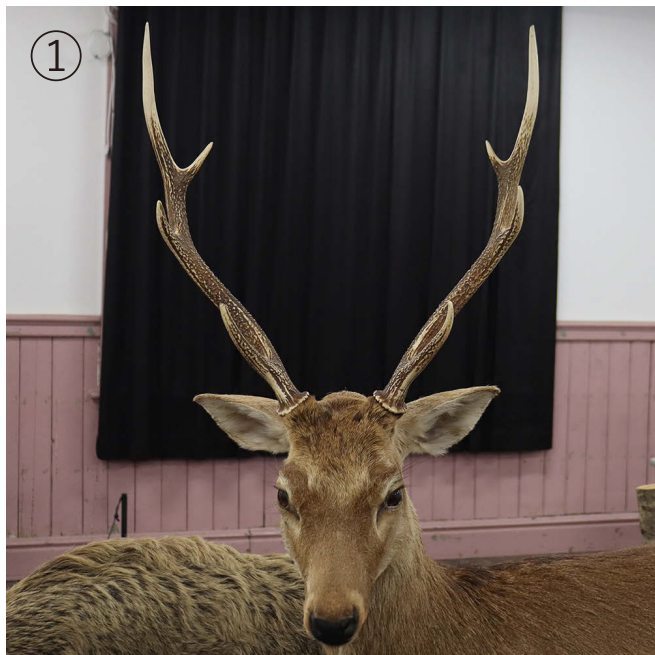
2020年9月に当館のfacebookページを開設してから、毎年1月に干支にちなんだ資料の紹介をしています。2024年は「辰年」ですが、野生動物の資料を収集している当館でも、伝説上の生き物である龍の標本は収蔵していません。しかし、龍の角のモデルとなったシカについては、ニホンジカの標本を19点収蔵しています。

シカ科の角は「枝角」と呼ばれ、その名の通り木の枝のように枝分かれした形状をしています。1年に1度生え変わるのが特徴で、当館が所蔵するニホンジカの場合、毎年3月頃に前年に生えた角が抜け、春から夏にかけて新たな角が枝を伸ばすように成長します。成長途中の角は「袋角」と呼ばれ、表面を柔らかな皮膚で覆われていますが、秋頃には皮膚が剥がれて中の角が露出します。

現在自然系展示室では「日本獣医生命科学大学附属博物館 第1回企画展 キリンが来た道～麒麟児 長次郎の歩み～」を開催しており、展示の主役であるキリンの角とともに、ニホンジカとスイギュウの角も御覧いただけるようになっています。興味のある方はぜひ当館までお越しください。

(学芸員 石井)

#日本獣医生命科学大学 #博物館 #辰年



- ① 自然系展示室の常設展エリアに展示されているニホンジカの剥製の角。
- ② 展示中のニホンジカの頭蓋骨。写真左がメスの幼獣、中央がオスの成獣、右がオスの亜成獣です。角が生えるのはオスのみで、1歳頃から角が生え始め、年齢により形が変化します。
- ③ 企画展に合わせて動物の角の解説をまとめたパネルを展示してあります。ぜひご覧ください。

【活動日誌171】アシカ類のDNAサンプリング

これまで経過をご報告してきた大型海獣類の剥製の調査ですが、先日DNA分析のためのサンプリングを行いましたので、その時の様子をお知らせします。

過去に実施したレントゲン撮影で、剥製の両後脚に指の先端に骨が残されていることがわかり、前回の作業では国立科学博物館の地学研究部・生命進化史研究グループ長の甲能直樹博士にご協力をいただき、剥製の状態調査を行いました。前回の状態調査の結果、剥製の外観にできるだけ影響を及ぼさないようにするために、剥製左後ろ脚の甲側の表面部分にある亀裂から確認できる末節骨の一部を切断して採取し、DNAサンプリングを行うこととなりました。

末節骨の切断には、0.5mmのカーバイドバーを付けた電動のルーターを用いました。骨は甲側の表皮に付着していたため、剥製の表面に影響を与えないように、下側を斜めに切断し、無事採取することができました。また、剥製の作成方法が時代によって変わることから、剥製の作成年代を推定するために、剥製に使われている材料についてもサンプリングを行いました。

採取したDNA分析用サンプルは、別のサンプルとともに後日分析が行われる予定です。結果が判明しましたら改めてFacebookでご報告させていただきます。

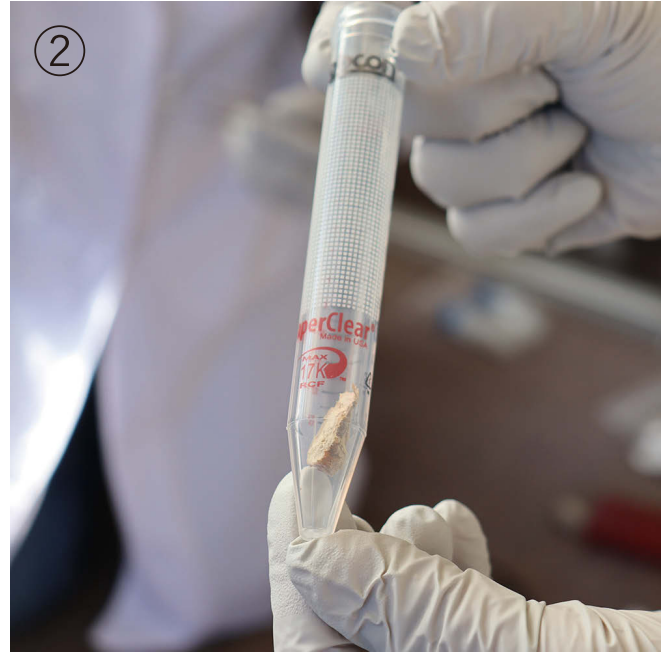
(スタッフ 廣瀬)

鰭脚類 # 日本獣医生命科学大学 # 博物館

【活動日誌165】剥製の状態調査

<https://tinyurl.com/29tmh577>

前回行った剥製の状態調査についてこちらの記事で紹介しています



- ① 左後ろ脚の甲側にある亀裂からカーバイドバーを用いて末節骨を切断している様子。持っている手にはかなりの振動がかかるため、間に休憩を入れながら慎重に切断作業を進めました。
- ② 無事採取されたサンプル。きれいな断面となっています。
- ③ 後ろ脚の整形のために用いられている充填材を採取する様子。石膏のようなものかと思われていましたが、漆喰のような素材の可能性があるとのことでした。
- ④ サンプルした骨(写真左)と剥製の充填材(写真右)。

【活動日誌172】解剖スケッチのデジタル化を実施しました

当館では学内に残された歴史資料の収集・保管を続けています。今年度は、日本高等獣医学校時代の学生が描いた解剖スケッチをまとめた冊子を対象に、資料のクリーニングとデジタル化を実施しました。先日、業者の方に預けていた解剖スケッチが返却されると同時に、スケッチを撮影した画像データが納品されました。

画像データを用いて冊子にまとめられた内容を確認したところ、全12冊の冊子の中に、320点の解剖スケッチが収められていることがわかりました。スケッチが作成されたのは1941年(昭和16年)で、当時日本高等獣医学校で学んでいた1年生が、鉛筆や色鉛筆だけでなくインクやクレヨンと思われるものなどの様々な画材を用いて描いています。描かれているのはスイギュウ・ヤギ・ヒツジ・ブタの筋肉・臓器・骨格で、スケッチ1枚毎にタイトル、スケッチした筋肉・臓器・骨格の名称、制作者の学年・組・番号・名前が記入されていることもわかりました。

興味深いのは、スケッチのなかにウマとイヌが含まれていなかった点です。スケッチが作成された1941年は第二次世界大戦の渦中であり、軍馬の治療のためにも獣医学生たちにはウマについての知識を身につけることが求められていたはずですが、また、当時はすでに小動物であるイヌも獣医師の診療の対象となっていました。別の冊子にウマとイヌのスケッチがまとめられ、これまでの歴史の中で紛失してしまったのか、何らかの理由によりウマとイヌのスケッチをすることができなかったのか、現時点では理由はわかりませんが、今回撮影したデータを用いて今後も調査を続けたいと考えています。

(学芸員 石井)

獣医学 # デジタル化 # 日本獣医生命科学大学 # 博物館

■【活動日誌143】解剖図スケッチブックのクリーニングとデジタル化を進めます

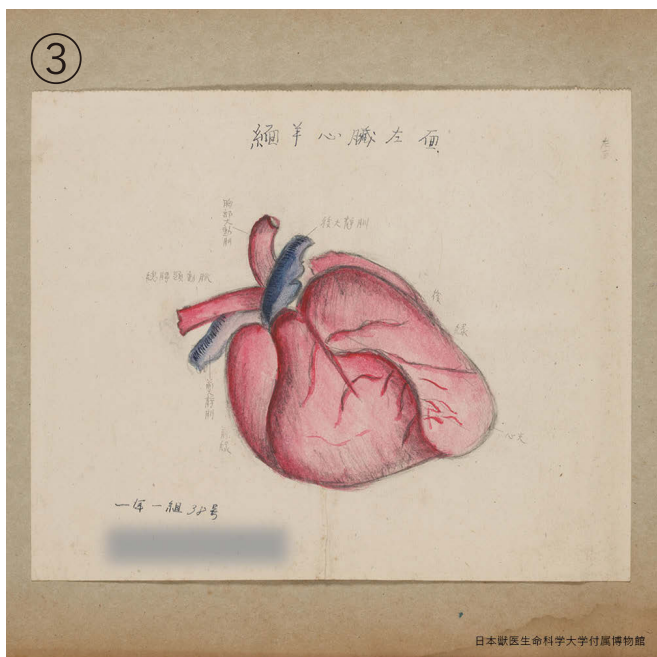
<https://tinyurl.com/3k7b65xs>

デジタル化の打ち合わせの様子はこちらの記事で紹介しています

■【活動日誌152】解剖スケッチの受け渡し

<https://tinyurl.com/ms7y7fnu>

デジタル化のための資料の受け渡しの様子はこちらの記事で紹介しています



- ① 解剖スケッチの返却：預けた内容と返却された内容に間違いはないか、確認しています
- ② 解剖スケッチの扉：昭和16年(1941年)に日本高等学校の学生が作成したものであることが読み取れる
- ③ 「綿羊心臓左面」と書かれたスケッチ
- ④ 「水牛の右後肢外面」と書かれたスケッチ

【お知らせ】入学試験の実施に伴う休館のお知らせ

入学試験の実施に伴う臨時休館日を含めて、下記の日程は休館とさせていただきます。

- ・1月31日(水)～2月6日(火)
- ・2月27日(火)～2月28日(水)
- ・3月8日(金)～3月11日(月)

ご不便をおかけいたしますが、ご了承くださいますようお願いいたします。

なお、開館日程は事前の告知なく変更になる場合があります。

ご来館の際は、博物館公式サイトにて最新情報をご確認ください。

■来館案内

<https://www.nvlu.ac.jp/universityi.../004/access/index.html/>

最新の開館情報はこちらでこちらでご確認ください。

【お知らせ】

入学試験の実施に伴う
休館のお知らせ

- ・1月31日(水)～2月6日(火)
- ・2月27日(火)～2月28日(水)
- ・3月8日(金)～3月11日(月)

【活動日誌173】博物館教育論の授業にて当館が活用されました

当館は本学で学芸員課程を履修する学生の教育の場として活用されています。先日は、博物館教育論の一環で履修生の3年生36名が当館を見学しました。

博物館教育論では、博物館における教育活動の必要性を知り、博物館が社会にどのような役割を果たせるかを考えていくことを授業の狙いとしています。今回の見学会では、博物館が行ってきたワークショップの事例を紹介し、授業の中で、当館が所蔵する資料や施設を活用した教育プログラムを履修生に立案してもらいました。

見学の翌週には、履修生が考えた教育プログラムの発表会が開催されました。7班に分かれて、それぞれが本学の学園祭でのプログラムや学校での出張事業などの場面に併せてテーマを考え、具体的なプログラムの内容について発表しました。班によっては、教育プログラムを実施する際に配る印刷物の内容まで具体化しているところもあり、事前講義と博物館の見学がきちんと活かされていたようでした。

(スタッフ石井・廣瀬)



- ① 当館で作成したワークショップ用の教材を紹介するスタッフ
- ② 今年度実施した野鳥の羽を使ったワークショップの教材を手にする履修生

【活動日誌174】剥製の燻蒸処理

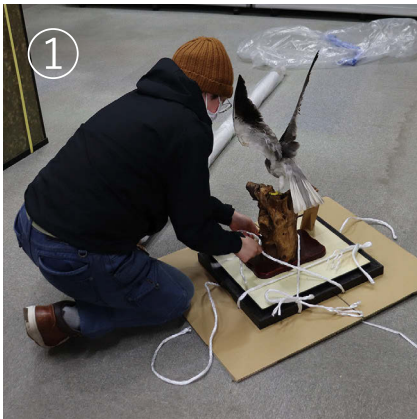
当館では、資料害虫による被害を抑えるために二酸化炭素処理装置を導入しており、これまでも何度かfacebookで紹介してきました。ですが昨年秋に装置が故障し、販売元から修理と再購入もできないとの説明があり、先日、当館では初めて燻蒸処理を外部委託で行いました。

今回の燻蒸では、昨年寄贈いただいた新しい剥製類と、今後DNA分析を行う予定のアシカ類を含む、一号棟の南階段の上の踊り場部分に設置されていた大学所蔵の剥製類を対象としました。燻蒸で使用する薬剤には、剥製の遺伝情報に悪影響を及ぼさない、ヴァイケン(フッ化スルフリル)を採用しました。

今回は当館として初めての燻蒸処理の外注ということで、燻蒸を行う倉庫への移動のための梱包作業と倉庫での処理、剥製の搬入を含めた作業を、キリンの骨格標本の補強工事の際にご協力いただいた、尼ヶ崎剥製標本社様にご協力いただきました。

無事燻蒸を終えた剥製たちは、現在2階保管室に保管しています。今後、ドライクリーニングを行ってきちんと保管するとともに、将来的には展示に活用してみなさんに見ていただけるようにしたいと思います。

(スタッフ 廣瀬)



- ① 段ボールと荷ひもで作った固定用の台座にカタグロトビを設置する様子
- ② 運搬中に動かないようにパレットに乗せたアオウミガメをPPバンドで固定する様子
- ③ トラックに積み込まれた剥製たち



- ④ 燻蒸から戻ってきたアシカ類の剥製を一号棟2階に運ぶ様子
- ⑤ 燻蒸処理を終えて2階の保管室に収蔵された剥製たち